

—— 千葉県市原市 ——

大羽根城郭跡

—— 南部外郭の測量調査 ——

1 9 8 6

森 永 開 発 株 式 会 社
財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市の中央を流れる養老川は、房総半島深くに源を発し、幾多の支流、支谷を形成し、県内有数の規模を誇っており、有り余る自然の恵みと人々の努力が調和し、多くの伝説と豊かな文化を育んでまいりました。

流域には、古代から人々が住み、数多くの遺跡を今に残しておりますが、その一方では、首都圏の一市として開発が急速化する今日、これら埋蔵文化財の保護との調和の必要性が高まっております。

ここに報告します大羽根城跡は、市内80個所に及ぶ城砦跡の1つであります。遺跡は、養老川の上流に近く、古来より、東京湾側と太平洋側とを結ぶ要路に築かれた中世の山城跡であります。

今回、高滝カントリークラブの造成に際し、城の外郭部分が開発の対象となりましたが、内郭については、関係者の深い御理解をいただき、現状保持の措置がとられることとなりました。これにより、測量を中心とした調査を実施した次第です。

本書は、この調査成果をまとめたものであり、研究者はもとより、広く市民の文化財保護の理解に活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、森永開発株式会社の御協力と、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課及び関係諸機関と多くの方々の御指導に厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月31日

財 団 法 人 市原市文化財センター

理 事 長 星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市本郷字郷堂1630他に所在する、大羽根城郭に付する南部外郭の測量調査報告書である。
2. 調査は、森永開発株式会社による、高滝カントリークラブの建設に伴い実施したものである。
3. 調査、整理作業、報告書作成作業は以下のとおり行った。

昭和61年 1 月16日～昭和61年 3 月31日

担当 調査研究員 鈴木英啓

4. 本書の原稿執筆は、鈴木英啓が行った。
5. 調査から整理作業の過程では、以下の諸機関、先学諸氏の御指導、御協力を賜った。

記して謝意を表します。

森永開発株式会社、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会教育指導部文化課、市立加茂中学校、千葉県城郭研究会。飯給在住の平野巧氏、市内在住の志藤一成氏。

調査期間中は、遺跡周辺在住の多くの方々のご協力をいただいた。

6. 本書に使用した地形図は以下の通りである。
- 1：50,000地形図 N 1－54－19－16あねさき（千葉16号）
- 1：50,000地形図 N－54－20－13おおたき（大多喜13号）

組 織

役 員

理 事 長	星 野 一 郎	(教育委員会教育長)
副理事長	横 濱 辰 夫	(教育委員会教育指導部長)
常務理事	内 藤 隆	(専任)
理 事	滝 口 宏	(早稲田大学名誉教授)
理 事	寺 村 光 晴	(和洋女子大学教授)
理 事	海 上 信 久	(姉崎神社宮司)
理 事	松 崎 良 一	(市企画部長)
理 事	斉 藤 栄 亮	(市総務部長)
理 事	中 島 英 夫	(市都市部長)
理 事	松 下 隆	(市総務部財政課長)
監 事	白 鳥 一 夫	(市会計課長)
監 事	松 本 辰之助	(教育委員会総務課長)

職 員

庶務課

課 長	田 丸 萬 富	調 査 研 究 員	浅 利 幸 一
主 事 補	大 鐘 光 江	調 査 研 究 員	近 藤 敏
事 務 員 (嘱 託)	秋 田 晴 美	調 査 研 究 員	高 橋 康 男
事 務 員 (嘱 託)	藤 澤 ひとみ	調 査 研 究 員	田 所 真
事 務 員 (嘱 託)	石 渡 あゆみ	調 査 研 究 員	大 村 直

調査課

課 長	清 藤 一 順	調 査 研 究 員	木 對 和 紀
主 幹	石 田 広 美	調査研究員 (嘱託)	田 中 新 史
主 幹	山 口 直 樹	調査研究員 (嘱託)	半 田 堅 三
主任調査研究員	宮 本 敬 一	調査研究員 (嘱託)	鈴 木 英 啓
調 査 研 究 員	米 田 耕之助	事 務 員 (嘱 託)	高 浦 貞 子
調 査 研 究 員	田 中 清 美		

凡 例

1. 遺跡名は、音羽根城、大羽根城等の名称がある。本書では、地籍名を名称とした後者を指示したが、本来の城名が不明確である以上、大羽根に所在の城郭遺跡としてとらえ、大羽根城郭跡とした。
2. 方位は座標北である。
3. 測量は、航空測量と地上測量とを併用し、500 分ノ1と1,000 分ノ1図を中央航業株式会社に委託して作成した。
4. 調査の対象は、内郭に対応する施設の一部分であり、切り離して考えることはできない。

その見地から、以下の図を参考資料とした。

1. 市原市教育委員会文化課作成の大羽根城内郭見取図1960年
2. 千葉県城郭研究会作成の大羽根城踏査図
1960年～1961年

組 織

役 員

理 事 長	星 野 一 郎	(教育委員会教育長)
副理事長	横 濱 辰 夫	(教育委員会教育指導部長)
常務理事	内 藤 隆	(専任)
理 事	滝 口 宏	(早稲田大学名誉教授)
理 事	寺 村 光 晴	(和洋女子大学教授)
理 事	海 上 信 久	(姉崎神社宮司)
理 事	松 崎 良 一	(市企画部長)
理 事	斉 藤 栄 亮	(市総務部長)
理 事	中 島 英 夫	(市都市部長)
理 事	松 下 隆	(市総務部財政課長)
監 事	白 鳥 一 夫	(市会計課長)
監 事	松 本 辰之助	(教育委員会総務課長)

職 員

庶務課

課 長	田 丸 萬 富
主 事 補	大 鐘 光 江
事 務 員 (嘱 託)	秋 田 晴 美
事 務 員 (嘱 託)	藤 澤 ひとみ
事 務 員 (嘱 託)	石 渡 あゆみ

調査課

課 長	清 藤 一 順
主 幹	石 田 広 美
主 幹	山 口 直 樹
主任調査研究員	宮 本 敬 一
調 査 研 究 員	米 田 耕之助
調 査 研 究 員	田 中 清 美

調 査 研 究 員	浅 利 幸 一
調 査 研 究 員	近 藤 敏
調 査 研 究 員	高 橋 康 男
調 査 研 究 員	田 所 真
調 査 研 究 員	大 村 直
調 査 研 究 員	木 對 和 紀
調査研究員 (嘱託)	田 中 新 史
調査研究員 (嘱託)	半 田 堅 三
調査研究員 (嘱託)	鈴 木 英 啓
事 務 員 (嘱 託)	高 浦 貞 子

凡 例

1. 遺跡名は、音羽根城、大羽根城等の名称がある。本書では、地籍名を名称とした後者を指示したが、本来の城名が不明確である以上、大羽根に所在の城郭遺跡としてとらえ、大羽根城郭跡とした。
2. 方位は座標北である。
3. 測量は、航空測量と地上測量とを併用し、500 分ノ1と1,000 分ノ1図を中央航業株式会社に委託して作成した。
4. 調査の対象は、内郭に対応する施設の一部分であり、切り離して考えることはできない。

その見地から、以下の図を参考資料とした。

1. 市原市教育委員会文化課作成の大羽根城
内郭見取図1960年
2. 千葉県城郭研究会作成の大羽根城踏査図
1960年～1961年

大羽根城郭－南部外郭の測量調査－

本文目次

序 文
例 言
組 織
凡 例

I 調査に至る経緯	1
II 環 境	1
1 遺跡と地理的環境	1
2 遺跡と歴史的環境	1
III 調 査	7
1 地形と立地	7
2 外郭内遺構	8
IV 小 結	10

挿 図 目 次

第1図 大羽根城郭跡と周辺遺跡	第4図 大羽根城郭跡の主要部
第2図 大羽根城郭跡と周辺地形	第5図 大羽根城郭跡俯瞰図
第3図 大羽根城郭跡と周辺地籍	付 図 大羽根城郭跡南部外郭測量図

写 真 図 版

図版－1 大羽根城郭跡と周辺の航空写真	図版－5 大羽根川上流・立山谷の上総掘井戸
図版－2 大羽根城郭跡遠景・南部外郭	図版－6 南部外郭の尾根道・同
図版－3 南部外郭の遠景・同	図版－7 南部外郭に残る土塁・同
図版－4 東側の立山谷・同	図版－8 内郭の空堀2態

I 調査に至る経緯

昭和59年11月9日付けで森永開発株式会社取締役社長川村邦彦は、市原市本郷字上立山1700－1番地他の高滝カントリークラブ（仮称）ゴルフ場建設に伴ない「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を千葉県教育委員会教育長及び市原市教育委員会教育長に行った。それを受けて千葉県教育庁文化課と市原市教育委員会は現地踏査を実施した。その結果昭和60年3月1付けで「大羽根城郭跡1か所」の回答がなされた。回答に基づき度重なる協議の結果、森永開発株式会社の協力により、大羽城跡の内郭部分は開発地区から除外することとし、また他の部分については縮尺1/500の地形図を作成するとともに城跡の縄張りを現地踏査し、図面に記録することの方針が確定した。測量調査は財団法人市原市文化財センターにより、昭和61年1月16日より同年3月 日まで実施されることとなった。（市原市教育委員会文化課）

II 環 境

1. 遺跡と地理的環境

市原市は千葉県の中西部に位置する。市内のほぼ中央を貫流して東京湾に流出する養老川の兩岸と、内湾に沿って開けた海岸平野とを合せ持ち、総面積は366.68km²を擁し、一市としては県内最大の規模を誇っている。

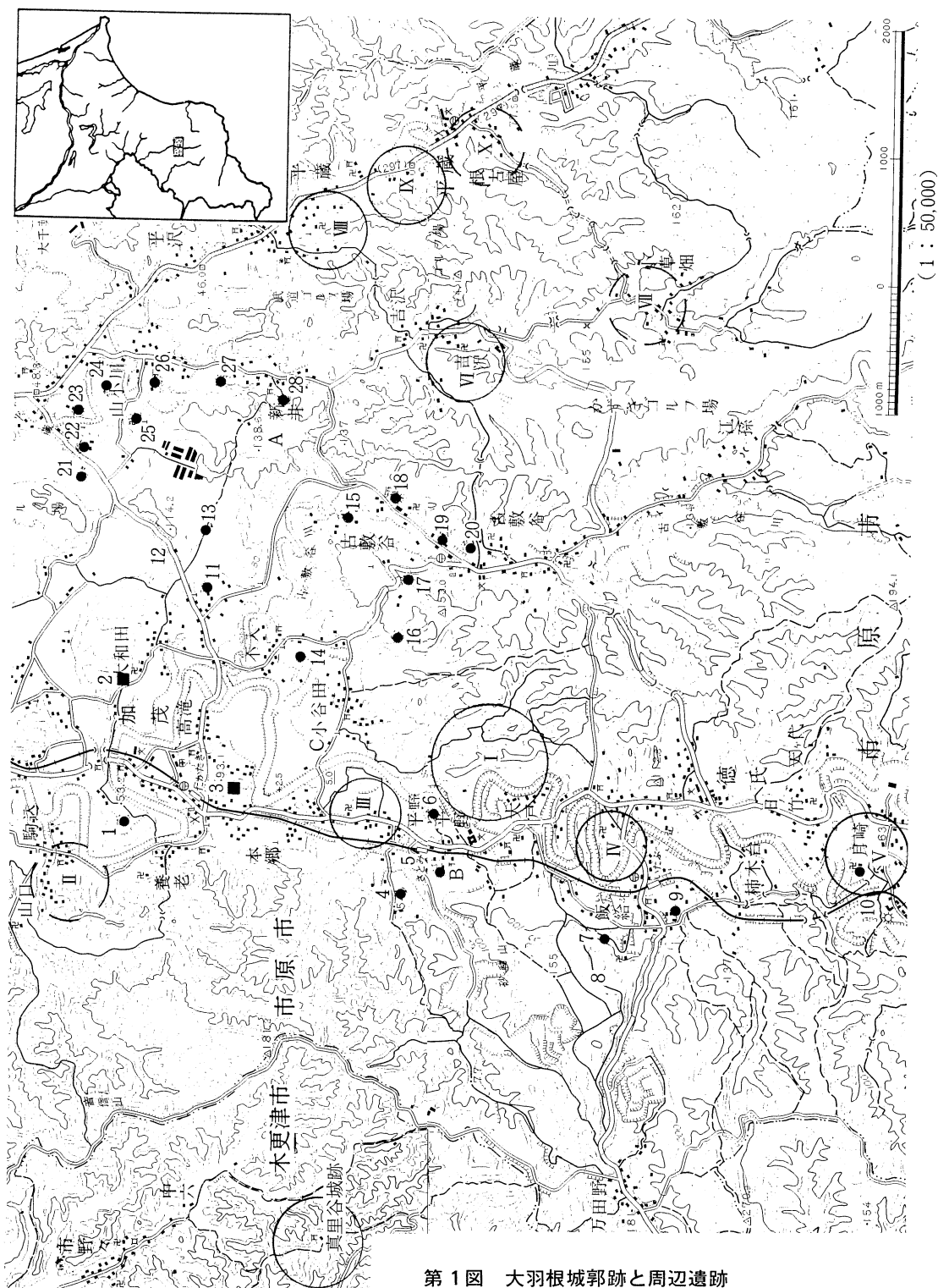
養老川は南部の上総丘陵の深部に位置する清澄山に源を発し、古敷谷川、平蔵川など幾多の支流を集め、北部の下総台地の南端近くを流れる県内では最大河川である。上流は標高200～300mを測る山地を深く切り込み、中流では高・中位河岸段丘を形成している。

遺跡は右岸中流域に属し、標高は60～122m、南北の全長は1,000m、東西の基底巾100～600mを測る山地に築かれた山城である。西側は養老川と、その蛇行によって形成された舌状の河岸段丘に、また東側は枝流の大羽根川によって開析された谷に面し、東西の両河川は遺跡の北端で合流して外堀を呈する。

南側は養老川に向って多数の小谷が連なり、その内の字・道生掘という帯状の谷が山際に沿って入り込んでいる。一方、東からは、字・立山谷の枝小谷が道生掘の谷頭に接しており、両者間はいくびれ、外郭の南端部に想定される所である。

2. 遺跡と歴史的環境 （第1～3図、付図）

本跡の周辺一帯は縄文時代の一大包蔵地でもある。特に早期の住居跡群を検出した、新井花和田遺跡－(A)（1959年市文化財センター調査）、後期から弥生時代中期初頭の上平野遺跡－



第1図 大羽根城郭跡と周辺遺跡

古墳時代～歴史時代の遺跡

1 番後台遺跡	11 市分布調査遺跡 NO.15	21 市分布調査遺跡 NO.3
2 大和田横穴群	12 市分布調査遺跡 NO.31 (古墳)	22 市分布調査遺跡 NO.6
3 宮原横穴群	13 市分布調査遺跡 NO.28	23 市分布調査遺跡 NO.4
4 市分布調査遺跡 NO.9	14 市分布調査遺跡 NO.41	24 市分布調査遺跡 NO.11
5 市分布調査遺跡 NO.13	15 市分布調査遺跡 NO.47	25 市分布調査遺跡 NO.12
6 皿郷田茂遺跡 (古墳群)	16 市分布調査遺跡 NO.58	26 市分布調査遺跡 NO.13
7 市分布調査遺跡 NO.40	17 市分布調査遺跡 NO.59	27 市分布調査遺跡 NO.35
8 市分布調査遺跡 NO.42	18 市分布調査遺跡 NO.56	28 市分布調査遺跡 NO.37
9 市分布調査遺跡 NO.46	19 市分布調査遺跡 NO.60	A 新井花和田遺跡
10 永昌寺廃寺	20 市分布調査遺跡 NO.66	B 上平野遺跡

中世城・館跡

(挿図番号)	(遺跡名)	(所在地・主要字名)	(性格・形態)
I	大羽根城郭跡	本郷一字・大羽根, 城	城 ・ 山城
II	——	山口一字・馬場 (近世か?)	? ・ ?
III	本郷堀ノ内遺跡	本郷一字・堀ノ内, 宿	館? ・ 平館
IV	飯給堀ノ内遺跡	飯給一字・堀ノ内, 寺台	館? ・ 平館
V	——	月崎一字・馬場, 関戸	城 ・ ?
VI	吉沢城郭跡	吉沢一字・吉沢台, 妙見	城 ・ 山城
VII	——	小草畑一字・花輪	? ・ ?
VIII	城部田城郭跡	平蔵一字・城部田, 中宿	城 ・ 山城
IX	平蔵城郭跡	平蔵一字・城山, 根古屋	城 ・ 山城
X	——	平蔵一字・茶ノ木台, 中屋敷	城 ・ ?

} 平蔵城郭群

遺跡分布図は、千葉県企画部企画課発行の「千葉県埋蔵文化財分布図」1978年 及び市原市教育委員会文化課による分布調査を参考とし、千葉県城郭研究会、千葉県中世遺跡記録会による踏査などの成果を加えたものである。

(B) の他、河岸段丘面に多くをみる。弥生時代では、須和田式土器を出土した、小谷田八木遺跡⁽¹⁾が、また古墳時代では、養老川の左岸、古敷谷川及び平蔵川の両岸などにみられる。

1984年、市文化財センターによって調査された、皿郷田茂遺跡⁽²⁾(6)では、下流に近い中流域の佐是が南限とされてき古墳群が確認されている。

歴史時代では、大羽根城郭跡の南、約2kmに位置する月崎に奈良時代と目される永昌寺廃寺⁽³⁾がある。

これら、中世以前の遺跡の分布状況は、大規模開発が進む中・北部からみれば、あまり知られていない。しかし、昭和53年、千葉県と市原市による、養老川中流域の開発計画に元づいた、高滝ダムの建設を契機として開発が着実に進行しつつあり、それに加えてゴルフ場の建設が奥地まで浸透するに及び、年々調査も増加する傾向にある。

養老川の中・下流の沖積平野と下総台地に比べ、上流に近い中流域では河岸段丘面の多くに遺跡が分布する他、先の新井花和田遺跡に例をみる如く、標高100mを越える丘陵部も又例外ではない。

中世では、今回調査の大羽根城郭跡の他、養老川とその支流である平蔵川に沿って城・館跡がみられる。これらの中世遺跡のほとんどが未調査と研究の立ち遅れから実態を把握するまでに至っていないのが現状ではあるが、旧来の在地豪族と15世紀の中葉にこの方面に進出した武田氏を代表とする新興勢力が築いたものとの差がおぼろげながら見えるようである。

天文年間、武田氏による初期の上総支配の拠点となった、真里谷、長南の両城は、南の安房国と北の下総国及び上総国の太平洋側（以下外洋）と東京湾（以下内湾）とを分断する位置にある。東の長南は外洋の地方都市から、上総の北部中央及び北東部又は、下総南部に通ずるいわば、東部ルートの中継都市であり、真里谷は安房北部から上総の中部を経て、同北西部及び下総の南西部を結ぶ中部ルートを押え、西上総の重要拠点であり、かつ海上交通の要衝である椎津と共に上総席捲の中心的位置を占める。後者の真里谷城は、東の養老川と、西の夷隅川を隔てる分水嶺に築かれており、両河川の沿岸と中間の丘陵上に開設された交通路を把握できる。

これら南北間の主要ルートに対し、東西を結ぶ交通路では、真里谷の南に位置する、万田野（第1図の左端）を中継として、養老川の大戸、更には古敷谷を経て平蔵川方面と、後の里見氏の拠点となった大多喜を結ぶ交通路が考えられている。

大羽根城郭跡は、伝えられている如き臨時の砦的施設ではなく、これら主要交通路上に築かれた拠点的な色合いの強い城であると言える。

註1. 藤崎芳樹 「市原市小谷田八木遺跡の弥生式土器」『研究連絡誌』第3号、昭和58年
(財)千葉県文化財センター

2. 山口直樹 「皿郷田茂遺跡」1959年 市原市文化財センター

3. 須田勉氏のご教示による。蓮弁の鑑瓦が出土するという。



第2図 大羽根城郭跡と周辺地形
(南側の濃いトーンが調査地)

Ⅲ 調 査

今回の調査は、測量調査をもって完結するという極めて変則的な方法をとった。第一の理由は、開発側の遺跡に対する理解の深さであり、内郭及び北部外郭、西部外郭は保存、南部外郭においても、遺構が集中する西側斜面部は、土取りの対象地区から除くという処置がとられた。

実質的な土取り部分は、東側斜面及び谷側であり、この付近一帯には、発掘調査を必要とする遺構が認められず、測量及び踏査によって記録する方法で実施した。

1. 地形と立地 (第3～5図 付図)

外郭とは、中心となるべき曲輪群を内郭と呼称するのに対し、その周囲または外側に付する、人工及び自然地形を利用した施設と理解している。

大羽根城跡では、今回の調査対象となった南部外郭は、大小7つの曲輪からなる内郭の南側に位置する、第Ⅵ-2郭の端から以南の約500m区間が想定された。南部外郭の主要部分は、字・立山と称する東側斜面から大羽根川上流域と、字・城と称する尾根から養老川までの斜面部一帯である。

字・立山の東側斜面は急傾斜であり、枝尾根は11か所を数えるが、通路として利用が可能な尾根は(イ)の1か所に限られている。東側の谷は、巾20～35mを測り、大羽根川及びその支流によって開折された樹枝状支谷を形成している。これらの谷、支谷は近年まで水田地に利用されており、上総掘り井戸が今でも清水を汲み出している。

字・城の尾根から西側斜面では、字の示す通り幾つかの遺構がみられる。尾根は、枝尾根の基部が小丘状高地a～jとなり、その間は馬ノ背状の痩せ尾根となる。特に傾斜が激しい東側谷に向って崩落が多くみられる。小丘状高地a～jとその間の標高は以下の通りである。

a～123m, b～117.5m, c～116m, d～114.5m, e～116.7m, f～116.6m,
g～126m, h～124m, i～126m, j～124mをそれぞれ測る。

中間地点では、内郭の第Ⅵ-2郭とaとの間が109.3mを測り、第Ⅵ-2郭との比高は13m, aとの比高は14mとかなりの比高差がある。特にこの部分は両側が急激にくびれており、自然崩落も手伝って巾狭である。また、a b間は110mあり、aとの比高は13mを測る。特にaの小丘状高地の南端は、自然地形にはみられない急角度の断ち落しが施されており、内郭と接するこの高地の重要性が伺えよう。頂部は尾根道として利用されており、先の(イ)の他、南端の(ロ)、西側斜面に通じる(ハ)の3か所が通行可能である他、多くの枝尾根はすべて急崖に面しており、利用された痕跡は認められない。

西側斜面では、中腹近くに大小8つの削平地からなるA地区が、またA地区の北西下方には

段丘状地形のB地区があり、両者共に字・城に含まれている。

A地区は、標高69～82m、尾根頂部からの比高は40mを測り、養老川に向って張り出した、南北2本の枝尾根上を削平している。

B地区は、標高40～50m、尾根頂部からの比高は60m、A地区からは20m下方に位置する。養老川の浸食によって形成された、東西130m、南北270mの段丘状地形である。

2. 外郭内遺構 A地区の規模は第2表の通りである。同所における削平地とは、城に付する建築物跡と推定される平場群である。その中心的存在はA-II、VI、VIIの3か所であり、特にA-IIは北東端に、またA-VIIは東側小谷に面した縁辺部に削り出しの土塁が遺存している。

北側のA-IIは、東にA-III、西にA-Iを伴い、A-I以西は尾根利用の通路があり、A-VIII間の小谷先端を経てB地区と結ばれている。

南側ではA-VII、VIIIは近年の農道により、堀状に削られているが本来は地続きである。両者共に調査対象外ではあるが、A-IV～VI及びVIIIはA-VIIに付する施設との見方が強く、踏査の対象に組み入れた。また南北の枝尾根の分違点近くには、(I)～(VI)段に分かれた平場がみえる。いずれも緩斜面ではあるが(II)と(III)は数段に分かれる可能性が高く、先のA-I～VIIIが水田又は耕作地として近年まで利用されていたのに対し、これらの面は旧態を残すものとして注目に値しよう。例えば、A-2から(I)→(II)→A-4→(III)→(IV)は階段状を呈し、直上のe高地へは比較的容易に登ることができる。このことから、A地区と本尾根頂部との通路的役割をもつものととらえられよう。

B地区は、A地区に比べ倍以上の面積を有するが、戦後の農地化に伴う地形改変のため、旧形状はつかめない。僅かに尾根側斜面下位に残る地形から、A地区同様の平場が存在した可能性がある。先端の養老川に面す縁辺部には土塁が残っている他は、8～11段に分かれた水田が残っている。

第2表 南部外郭A地区の平場計測値

NO.	規模 m		面積 m ²	比高差 m	備 考
	長 軸	短 軸			
A-I	15	10	143	A-II～ 2.1	西端に尾根道
A-II	55	28	1.300	A-III～ 2.1	北東端に土塁と横井戸
A-III	35	6	177	a高地～ 40.6	北側に横井戸と水路
A-IV	20	4	60	e高地～ 33.8	
A-V	25	8	177	A-VI～ 3.6	
A-VI	25	17	413	A-V～ 1.7	東・北側周縁に溝
A-VII	70	40	< 1.637 >	A-VI～ 3.4	東側周縁に土塁、西側中段に腰曲輪 北西端に尾根利用の小規模削平地
A-VIII	20	10	(173)	A-VII～ 1.0	南側中段に腰曲輪

注・() 付は、残存値 < > 付は、推定値



第4図 大羽根城郭跡の主要部
(千葉県城郭研究会参考図)

A地区の平場には井戸、炭窯跡などがみられる。いずれも近年の耕地化に伴うものであろう。

1・2は斜面に掘り込まれた横穴状の清水集水施設であり、3は水路である。4・5は緩斜面に位置する浅い竪穴、6は基底径3.5m、比高60cmを測る楕円形の盛土である。7は近年の炭窯跡、8は降雨時の排水溝である。この一帯は土取りの対象から外されており、4～6の遺構及び平場の性格は、発掘を伴わぬ今回の調査では解明できない部分が多い。

次にA・B地区と本尾根及び内郭との通路である。まずA・B間は、A—I・IIから発する小尾根を利用した2か所の通路があるが、B地区から直接本尾根、内郭方面と結ばれる個所は認められていない。A地区かからは直上のe高地下に緩い尾根道がある他、東側斜面は総体に傾斜が緩く、不明確ではあるが階段状の平場跡が続くようである。

本尾根から発する枝尾根イ～チの内ハ、ホ、ヘ、チの4か所が通行可能であり、特にハ地点は断面下位に緩斜面の平場状施設がある。また、枝尾根の基部である小丘状高地の内、a、h、i、jの4か所は眺望に優れ、見張台として利用された可能性が高い。

IV 小 結

今回の調査によって、今まで臨時の砦として伝えられてきた大羽根城郭跡が、連郭の山城としては、石川城郭跡（1982年市文化財センター調査）に次ぐ大規模な城であることが判明した。

内郭の構造及び、外郭線と推定される地域から、本格的な中世山城としての全体像が浮び上がり、今後のこの種の調査研究に大きな手掛りを与えたといえるだろう。

しかし乍ら、綿密な縄張り土木技術が要求されたであろう城としては、単に伝承の中のみ“里見氏の支城”として語り継がれている他、現時点では、文献その他の資料に記述がみられないのは惜い限りである。

ここでは、今回の調査によって明らかとなった部分について記述し、今後の参考としたい。

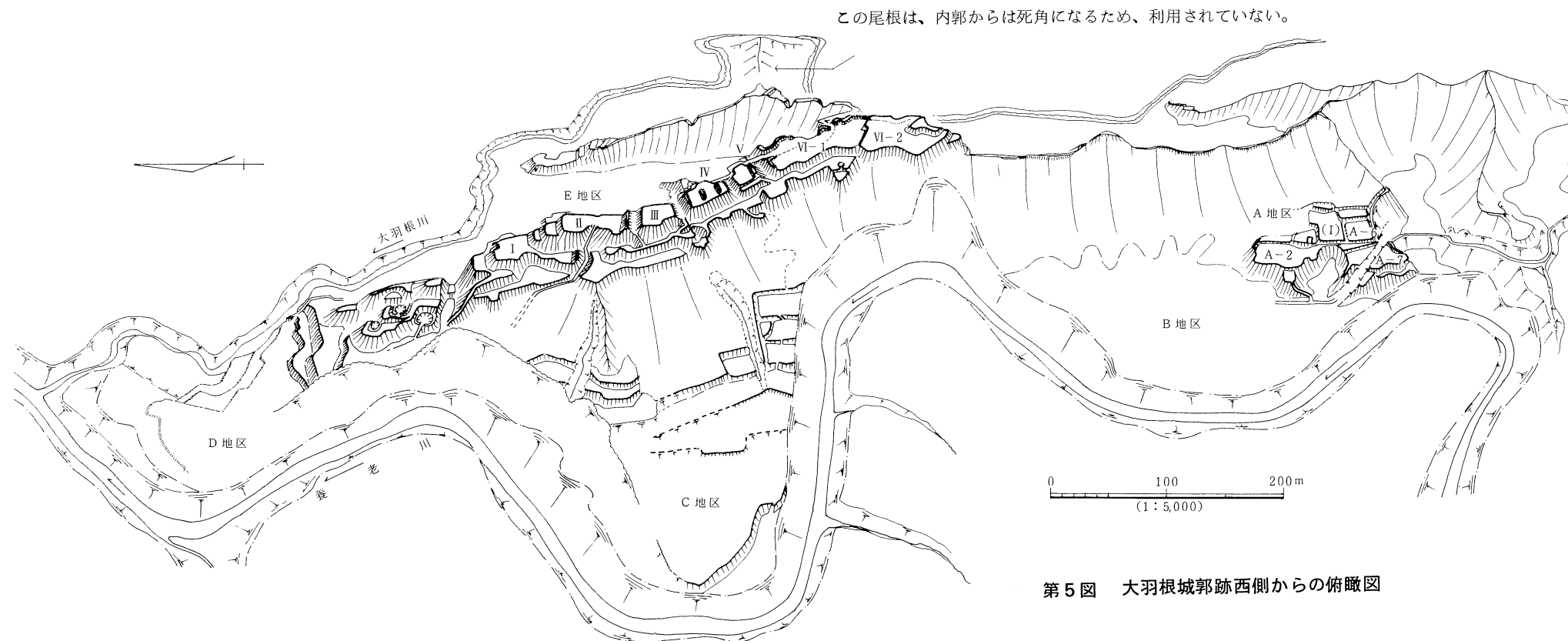
本跡は、城の中心部を占める内郭とそれに付する外郭とに分かれる。まず、北側約 $\frac{1}{2}$ の本尾根頂部を削平し、5か所の空堀と7つの曲輪を、更に、左右の斜面上位には通路によって結合する腰曲輪を配した内郭の施設がある。これらの山頂及び斜面部の削平地（平場）は35か所を数える。

外郭は、居所及び集落の推定地を含め、今回調査の南部外郭の他、西側のC地区、北端のD地区、東側のE地区などがある。中でも字・上大羽根を付するC地区は、B・D地区同様に耕地整理がされているものの、内郭西側斜面下位に4段階に分かれた10か所以上の平場が遺存しており、A・B地区と共通の施設跡と推定できる。その他、城跡の南側に広がる飯給地区の段丘面からは13～16世紀に比定される、白磁、瀬戸などの陶磁製品と鍛冶滓も出土しており、中世集落が存在する可能性が高い。

次に枝尾根の利用状態であるが、内郭及び、南部外郭を合せると、東側の大羽根川方向に大小31か所、西側の養老川方向に9か所の計40か所がある。その内、外郭部からの連結道として利用されているのは以下の通りである（踏査により通行可能尾根と不可能尾根に分けた）。

内郭東側～4か所、同西側～1か所、南部外郭東側～1か所、西側～2か所の他、本尾根1か所の計9か所である。その中にあって、内郭の第VI—I郭東端に結合し、大きく3方向の枝に分かれる尾根は、一見なだらかにみえる真東に張り出した部分は断ち落され、真北に張り出した部分のみ利用している。これは、南部外郭の尾根道（ハ）にも見られるが、内郭から、裾部まで見通しのできる枝尾根のみに限られていることは興味深い。

いずれにせよ、この種の遺構では単に曲輪の集中した内郭部分のみをもって城とする傾向が研究者の間においても根強く残っている。内郭に対する外郭、この関係は城を構成する上では欠かせず、切り離しては城の存在そのものは成り立つまい。その意味では、考古学的調査は伴わずとも今回の調査の成果は大きいものと言えよう。

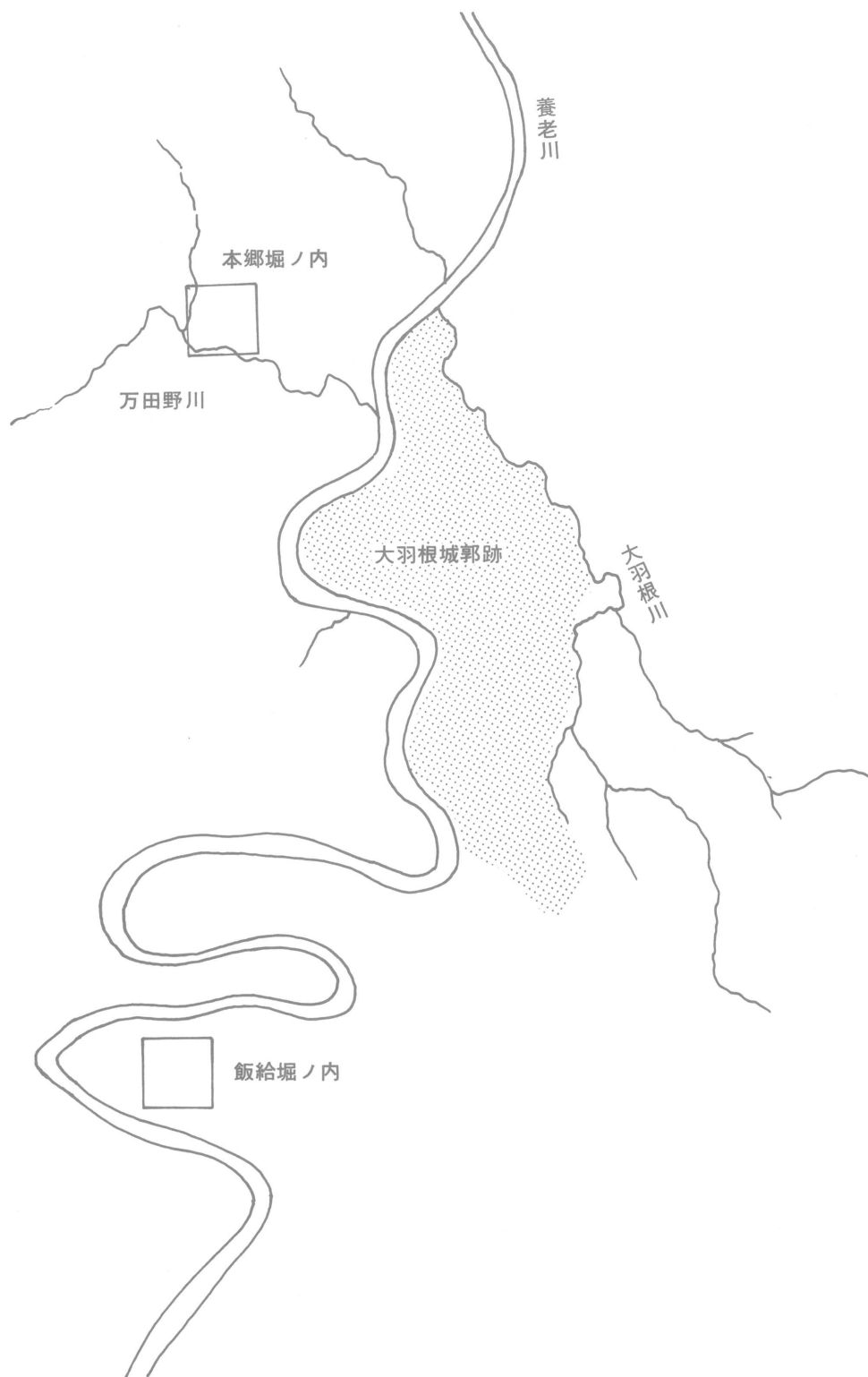


第5図 大羽根城郭跡西側からの俯瞰図

大羽根城郭跡全容図 図の左側約 $\frac{1}{2}$ が内郭と、北部、東部、西部の外郭群である。

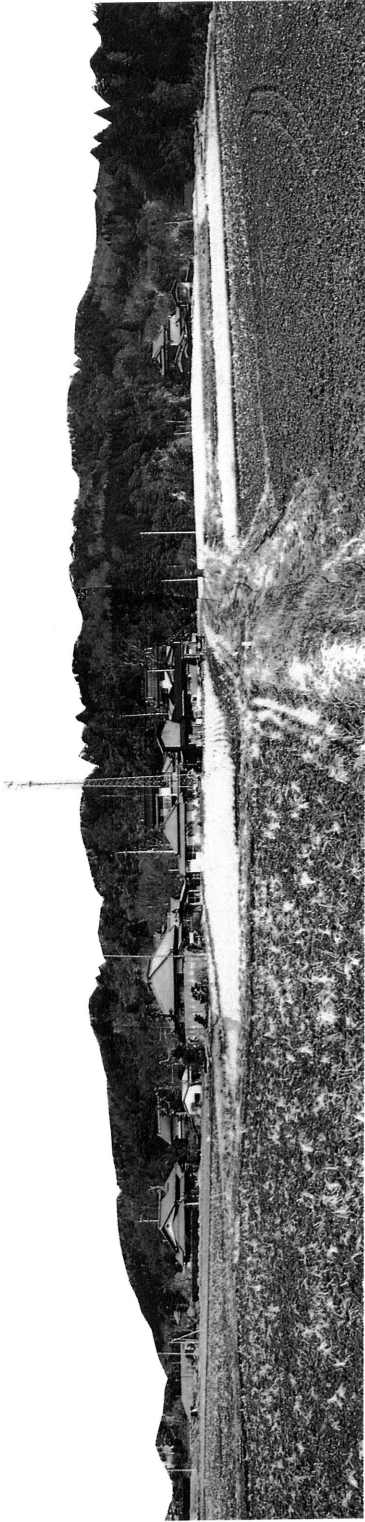
残る右側部分が、今回の調査対象となった、南部外郭である。

本図は、市原市教育委員会文化課作成の概要図と、千葉県城郭研究会による踏査参考図に、今回の調査成果を加えたものである。この内、内郭の曲輪及び空堀の規模については、必ずしも現状に沿うものではないが、南北の距離、曲輪、腰曲輪、空堀の土塁の配置状況と相互の関係（腰曲輪間及び腰曲輪と堀、曲輪の合流点）については、ほぼ図の如くである。

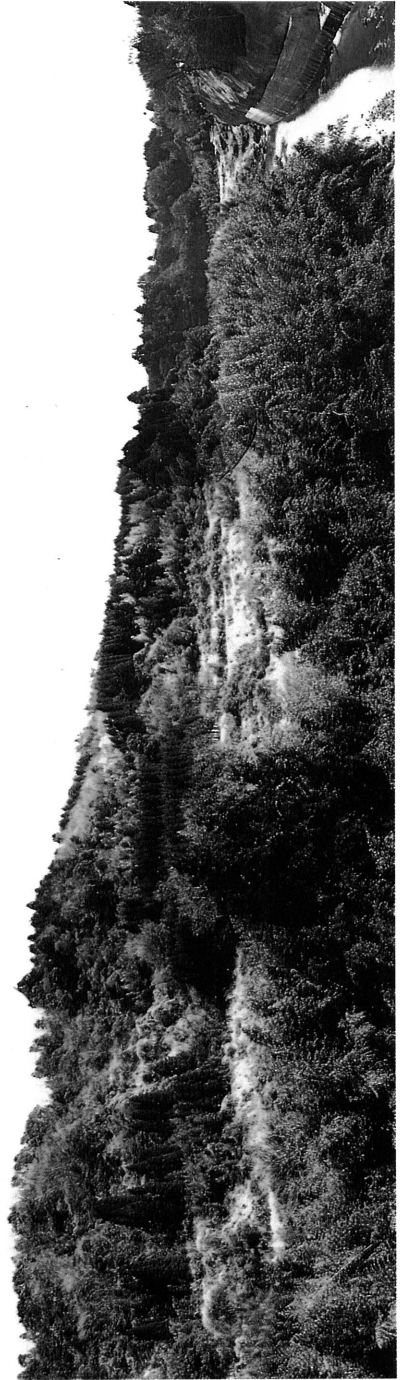




1. 大羽根城郭跡と周辺の航空写真



1. 大羽根城跡全景（西から）



2. 南部外郭の西側，中央から左が字「城」，右端は養老川



1. 南部外郭遠景（南西から）



2. 同上遠景（西から）



1. 東側の立山谷（南から）



2. 同上（東から）



1. 立山谷の深部，大羽根川の上流（南から）



2. 立山谷に残る「上総堀」井戸



1. 南部外郭の尾根道 - (ハ)



2. 南部外郭の尾根道 - (ハ)



1. 南部外郭に残る土塁と削平地（西から）



2. 同上（北から）〔造成の対象外〕



1. 内郭の空堀(参考)



2. 内郭の空堀(参考)

—— 千葉県市原市 ——

大羽根城郭跡・一南部外郭の測量調査一

昭和61年 3 月20日 印刷

昭和61年 3 月25日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 森 永 開 発 株 式 会 社
財団法人 市原市文化財センター
千葉県市原市馬立817番地

印 刷 (株)国際技報舎市原営業所
千葉県市原市惣社867-18
TEL 0436(21)2355